

実務表現

ことば遊びに学ぶ

萩原 義雄

五七五のリズム川柳に見る回文

「回文の屋号八百屋に焼接屋」と云う、上から読んでも下から読んでも同じ文章ことば、これを「回文」と呼称する。江戸の「八百屋」に「焼接屋」と三字から五字程度のことばとはいえ、「小箱」「逆さ」「寿司酢」「新聞紙」「田植え歌」「SBS」などと良く探せば身の回りにあるわあるわ回文ことばなのである。地名や人名においても「田端」「龍田」「杵築」「小池啓子」「小俣玉雄」と続く。これが句となれば「西か東に」「夏まで待つな」「留守に何する」「慥かに貸した」「如何にも苦い」「意外に意外」「恋なんかわかんない娘」「私負けましたわ」「内閣退くかいな」「夏まで待つな」「慥かに貸した」「ダンスは済んだ」「磨かない鏡」「」となっていく。時には破格まがいのことばも登場する。上から読んでも「山本山」式に、「赤坂」をローマ字にして「AKASAKA」となっていくから面白。よく使う説明に、「ROMA」を逆に読むと「AMOR」となったりする。これを「倒言」という。これが次に冒頭でも触れた五七五の「俳句」「川柳」や更に五七七七の和歌や短歌・狂歌ともなると、回文にも味がでてくるというものだ。これを見事に上から読んでも下から読んでも同じという決まり事を頑なに守り実行すると、ちよつときついものがある。そこで、清濁共通で良い、仮名遣いは許容とすることで自由闊達な回文が登場してくるのである。

江戸時代の松江重頼著『毛吹草』（寛永十五年（一六三八））は、正に江戸回文の魁資料ともいえる作品群である。また、その後を追うかのように『世話字尽』（明暦二年（一六五六））が一回っていることからその盛況ぶりが伺えるのである。

咲くかずは十とやとをと廿日草 『ゆめみ草』卷五

ここには「咲くかずは」と「はつかぐさ」に見るように、「かず【数】と「かつ」で清濁も仮名遣いも破格にして表現している。

『毛吹草』の回文発句（春夏秋冬）を幾つか示しておこう。

目をとめよ梅かながめん夜目遠目	重貞
ながむへき庭はや母に木へんかな	重方
花乃鈴なりけりけりな鈴の縄	春可
永日に舞蝶とぶ蝶二疋かな	作者不知
友乃來つ子規猶なきし月の下	宗房
葉乃筋ハしら糸いらじ蓮の葉	重頼
峯に野乃萩かや垣ハ野の錦	作者不知
咲みたか互にみたか形見草	梅盛
乳も呑かよるこふ子ろよかんの餅	作者不知
ひえにけさのむかやかんの酒に酔	重方

室町時代の古辞書『運歩色葉集』（元龜二年本久部195頁）に収録された回文歌二種を見ておこう。
むらくさに草の名はもしそなはらばなぞしも花の咲くに咲くらむ

長き夜のとをの眠りのみな目醒め波乗り舟の音よきかな

この二首の回文歌は、実に巧妙なものとなっている。後の歌は、正月の初夢を見る際に枕の下に七福神の凶会と一緒にこの歌を添えておくと好運が廻ってくるよとされた、歌意は、「とをの眠り」が「遠の眠り」と「疾うの眠り」にも取れて懸け詞になっているように思えてならない。

そして、もう一つ「キシノカタモ、タカノシキ」という文句を添えている。

連歌にも、
眺めしは野菊の茎の初めかな／咲く花は咲く草花は草／知らぬげに案山子に鹿が逃げぬらし／弓
張り取らむ群鳥は見ゆ／悋氣言ひ腹立てたらば鬮負無理／聞くにぞ憎き聞くにぞ憎き／詠みは置
く歌道の歌か句をば見よ／歴々の詩も文字の裂々／しつくりと御家の塀を取り崩し／大工繕ひ
広く造いた

と云ったグループ趣向の回文創作が試みられている。

回文を私たちも創ろう

回文の「キイワード」表は、「倒言」を知ること、生まれてくる。

くるま【車】は「まるく【円】」

くすり【薬】に「リスク」

ゆき【雪】はきゆ【消】

うめぼし【梅干】の「萎め雨」

くろい【黒い】と「いろく【色苦】」

うつくしい【美】が「イシクツウ【意志苦痛】」

かたな【刀】は「なた【鉞】か」

いいおんな【好い女】…なんをいい【難を云い】

いいおとこ【好い男】…ことをいい【異を云い】

などと普段から、鉛筆とメモ紙を用意して、この手のことばを吟味しておく、手っ取り早く即座に回文を書き出すことができるようになるというものだ。この組み合わせを次第に長くしていくことができればいいのだ。昔、東大教養部のトイレの落書きに、「へアリキッド ケツにつけ どっきりアへ」と云う回文が書かれていたという。実に巧い回文であった。平成の時代を諷刺した回文を是非創ってご披露願いたいものである。

尻取り合戦

お金はないが、時間はある。このとき最低二人の人がいればできる「ことば遊び」が「尻取り」である。ルールはことばの末尾に「ん」がくると負け、ことばの豊富さが勝ち負けを決める。日本語の弱点であった、ラ行音のことばが多くなるとつらいものがあるが、昨今はカタカナ用語が日本語に多く取り込まれ、このあたりを補填してくれているので意外と手強いことば群となったのが事実である。

《ラ行ことばカタカナ語》

「ラ行」ラクダ・ラッパ・ランドセル・ラジオ・ラジカル・ラスク・ラッシュアワー・ライスカ

レー・ライセンス・ライター・ライダー・ライト・ライブ・ライフセーバー・・・
「リ行」リラックス・リフレッシュ・リトル・リミット・リアリティ・リーズナブル・リーダー・リーチ・リカバリー・リクエスト・リクルート・リサイクル・・・
「ル行」ルール・ルーム・ルーラー・ルアー・ルーキー・ルーツ・ルート・ルーペ・ルーレット・ルックス・ルネッサンス・ルワンダ・ルンバ・・・
「レ行」レール・レantal・レアチーズケーキ・レイアウト・レコード・レインコート・レインボー・レース・・・
「ロ行」ロッカー・ロック・ロイヤル・ロイター・ローズ・ロイヤルゼリー・ロマネスク・ロカル・ロマンスカー・ロースト・ローズマリー・ロード・ロードショー・・・
茲にざっと、頭に浮かびあがってきた片仮名ことばを記しておいたので、参考とされたい。

洒落だか駄洒落だか

これは「あのねのね」という歌手兼ギャグ・コンビのネタである。

「サカナ屋のオッサンがア、死にはった。ギョッ」

「サカナ屋のオッサンがア、屁こいた。ブリ」

日本人の食文化は魚類と縁が深いというか、食卓に魚が乗ることが多く、ついつい「魚名づくし」式に「洒落」てみるのである。「おとなしい坊に土産を買ってきて……ほしいいか【干し鳥賊】」と云うようにだ。時には相手が気に入らないとまぜつかえすことば表現にもなんと、「魚ノ名」が口をつけて出るといふ塩梅である。たとえば、「ありがてえなあ」とお礼の一言が出ようものなら、「蟻が鯛

だとお、蟻が鯛なら芋虫や鯨、蜈蚣汽車なら蠅が鳥」という具合に受け答えしてしまう。女性に「ええ！」と返事されたら、すかさず「ええ【鱒】よりたこ【蛸】旨い」とやり返すのも同じ。

人名の駄洒落もある。或時、同じ会社の社員として「堺」「酒井」「坂井」と同じ呼び名の三人の「サカイ」さんがいて、電話の受け継ぎに事穏やかならずの課長さんが「サカイが三人でミサカイがつかんわい」としゃれて抗弁したことがあったそう。作家名もややくそ気味に「クタバツテシマエ」と自嘲して付けたというのが明治の作家二葉亭四迷である。

謎かけ

幼稚園くらいの子から小学校低学年の児童に人気のある「謎たて」は、「かけてもかけても前に進まないもの、なあに？」と云うのがある。実は答えは一つでないから面白い。普通身近なものを記憶して答えるから、答えは「いす【椅子】」。その他「洋服かけ」「ふりかけ」「電話」「メガネ」「レコード」「かけ算」「ルームランナー」と身近にある物の答えが飛び交うのである。これが一段、二段と上達すると、次のような「何とかけて何と解く、その心は何々」式の「謎立て」が作られるのである。

「独身寮」とかけて「火葬場」と解く。その心は、「シタイ、シタイ」でいっぱいだ。

「美脚」とかけて「万国博覧会」と解く。その心は、「パンツ穿く」の？は、林屋喜久蔵さんクラスかな。「あんたも好きに」。

「コーヒー」とかけて「実らなかった恋」と解く。その心は、「苦さの中に甘味も酸味もありま

す」。「ダ・ヴィンチ・コード」とかけて「小泉改革」と解く。その心は「分かりやすい映像」に潜む

功と罪」—二〇〇六年五月三〇日 火曜日 寺山 正一 [新産業夜話より](#)—

「新聞の朝刊」とかけて、「和尚さん」と解く。その心は、「袈裟来て、経よむ」現代の三段謎かけは、実にバラエティなものがある。

ところで、古典作品に吉田兼好『徒然草』にも名高い「なぞ話し」が書かれていることは、意外に知らない、気づかないであろうからここに紹介しておこう。第一三五段に、

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中将にあひて、「わぬしの問はれんほどのこと、何事なりとも答へ申さざらんや」と言はれければ、具氏、「いかゞ侍らん」と申されけるを、「さらば、あらがひ給へ」と言はれて、「はかばかしき事は、片端も学び知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそざることの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らめ」と申されけり。「まして、こゝもとの浅き事は、何事なりとも明らめ申さん」と言はれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは、御前にて争はるべし。負けたらん人は、供御をまうけらるべし」と定めて、御前にて召し合はせられたりけるに、具氏、「幼くより聞き習ひ侍れど、その心知らぬこと侍り。『むまのきつりやう、きつにのをか、なかくぼれいり、くれんどう』と申す事は、如何なる心にか侍らん。承らん」と申されけるに、大納言入道、はたと詰りて、「これはそざることなれば、言ふにも足らず」と言はれけるを、「本より深き道は知り侍らず。そざらごとを尋ね奉らんと定め申しつ」と申されければ、大納言入道、負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

とあつて、源具氏(建治元年没・四四歳)が大納言藤原資季(正応二年没・八三歳)に「日頃不審に思つてゐることをお尋ねして宜しゅうございますか」と念押しをして聞くことになった。これを殿中の人々が小耳に挟み、後日御前でご披露することになった。具氏は、「幼い頃から聞いていることなのですが、どうしても解けないのがこのことばです。どのような意味なのでしょうか」と云つて、

むまのきつりやう、きつにのをか、なかくぼれいり、くれんどう

という文言を大納言資季に問うたのである。このとき、大納言資季はこの文言について全く分からず、「こんなくだらぬことは、論外だ」と言い逃れしようとしたが、「他愛もないことをお尋ねすると、前もつてお約束しました」と詰め寄られ、大納言資季は高慢な姿勢を挫かれたという内容がこれである。だが、作者兼好は、この文言の謎解き解説を一切していない。このことは、すべて智慧ある人であれば承知することと云うのか、問いかけた具氏自身も知らないのであれば、その解釈のほどを知りたいと思うのは人としてごく当たり前のことではあるまいか。さて、兼好自身知っていたのか知らぬのかこの「なぞ」の文言を載せたことで、一躍知られるようになったからその注釈者は、考えさせられるハメとなったのである。実際、真名本『徒然草』では、

馬吃糧、狐丘凹、入九連等 「服部南郭」

馬吉駮、狐丘凹、入九連倒 「堀保己一」

としているが、この元のことばを漢字を以てこじつけてしまっていて、これでは始末が悪い。謎解きが難解になってしまうことは見たとおりであろう。実際、このなぞを解いたのは、京都に住居した俳人柏原瓦全(一七四四—一八二五)であった。賦物式のなぞを知る手がかりは、宮方にお仕えたことのある老婦人が「椿落ちて露となる」を「雪」と解いた。「ツバキ」の「ハ」が落ちて「ツキ」、この「ツ」が「ユ」と成ると云う仕組みである。これを瓦全は、上記の文言に応用したのである。

謎解きを試みよう。「馬退きつ」で冒頭を削除する。「りやうきつにのをか」を「中凹れ入り」は、最初の「り」と最後の「か」だけを残し、其の中間七字「やうきつにのを」を陥没させてこれも削除する。「りか」の語を最後に「ぐれんどう」即ち「顛倒」させると、答えは「かり【雁】」と成るのである。だが、此の後、「馬退きつ了」とし、「きつにのをか」の六字を「なかくぼれいり」と解釈した別解が表出する。これを「中窪」「れ入り」とし、「つにのを」の四字を削り、この間に「れ」を入

れて「キレカ」、これを顛倒させると「かれき【枯木】」と成るといった安良岡康作『徒然草全注釈』の説がそれである。謎立ては、作り手が考案したとき、解答は一つしかなかったはずだが、よくよく考慮吟味してみるに、別解が考えられるから妙味なのである。

こうした「字謎」は、今日でも途方もないところでお目にかかるから不思議だ。これは電車つり広告にあったダイヤモンド社のもので、「外資系企業が欲しがらる脳ミノ」と題した問題適応力をためす方法に、

「嘘つきの始まりは泥棒の始まり」と云いますが、「嘘つきの始まりは泥棒の終わりでもある」ものは何か？

というは、当に「字謎」そのものである。如何でしょうか？

また、最初の三段なぞについても、江戸時代の松平樂翁（一七五八—一八二九）の随筆『退閑雜記』に、

「かけがね」と懸けて「何と解く」

1, 浪花の人「大船」と解く、その心は「港（江戸）に着く」。

2, 京の人「女」と解く、その心は「殿（江戸）の機（機）さんに着く」。

3, 江戸の人「茶碗酒」と解く、その心は「引（江戸）かけて寝る」

といったように、三都それぞれの解が人情を反映しているが、これを現代の長寿テレビ番組「笑点」に見ると、まさにこれを地で行く感がある。

こうした、洒落を応用する心構えがあれば、人を動かす歌や文章にも自ずと磨きがかかってこよう。和歌の三段なぞを見てみると、

我が戀は 細谷川の丸木橋 ふみ返されて ぬるる袖かな

「私の恋」とかけて、「細谷川の丸木橋」と解く、その心は「ふみ（文）」と「踏み（返）されて袖をぬらす」。

と云った具合にことばを掛け合うことで表出するからだ。

※《コラム》平家が栄えていた頃、その一門に平通盛は后にお仕えする美女小宰相に戀をしながらも、いつも彼女の連れなない仕打ちを恨んでいた。或時この一首を通盛は彼女の車の中に投げ入れたのである。この文を路上に捨てることもならず、腰に挟んで女院のもとに参内した折、門院の前でこの文を取り落としてしまうのである。女院はその文の主の心得があった。女院は小宰相に代わって返し哥を詠まれたのである。

ただのため 細谷川のまる木橋 踏み返しては 落ちざらめやは

この後、通盛は小宰相を妻に賜ったと『平家物語』巻第九は、記しています。

ことわざ」にもその真髓がある。例えば、

親の意見と冷酒はあとできく

「冷酒」とかけて「親の意見」と解く、その心は「あとできく」。

こうしたしゃれた表現の「ことば遊び」そのものに、書くことの奥の院を学ぶところは、私自身「大」とみたのである。世界中のことば文化を以てすれば、こうした「謎立て」はもつと視野が広がるであろう。最後に、中国後魏第七世宣武帝の御代咸陽王と従者竜虎の「舊謎立て」を見ておこう。

眠レバ則チ俱ニ眠リ、起レバ則チ俱ニ起ル、貧ルコト如ク豺狼ノ一、賦スルモ不レ入レ己ニ、都ベテ不レ有レ小ナルコトニ規キ刺シ

一也

その答えは、「眼」と咸陽王は前半部に目を走らせただけ、実際の解答は、「箸」である。「箸」は人が眠るときには眠り、起きれば起きる。食物を食することはまさに豺狼に等しいが、己のために掻き込む物ではない。大ききもとげより小さいことはない。こどもの「謎かけ」に「いる時にいらなくて、入らない時にいる物なあーに」に類似しているよう。こうした「謎立て」も文章をときめかすに大きな働きをしてくれるから実に不思議でもある。どうぞ、智慧の遊び存分に嗜んでみませんか？